静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第180集

宗光寺横穴群
横山段横穴群

平成19年度　横山段急傾斜地崩壊対策（公共関連一大規模）工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第180集

宗光寺横穴群
横山段横穴群

平成19年度　横山段急傾斜地崩壊対策（公共関連一大規模）工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

蒼林に覆われた天城連山を水源とする狩野川は中下流域に田方平野を形成し、駿河湾に至る。この田方平野を中心に、韮山町・伊豆長岡町・大仁町が合併して誕生した伊豆の国市が広がる。市域には、弥生時代の山木遺跡に始まり、幕末の反射炉まで、各時代において静岡県を代表する遺跡が存在する。保存・整備されている史跡も多く、歴史の息吹を感ずることができる市である。

今回、調査を実施した宗光寺横穴群・横山段横穴群は、古墳時代後期～奈良時代の遺跡であるが、伊豆の国市を中心とした伊豆の北部は東海地方でも屈指の横穴盛行地域である。伊豆の横穴群は、古くからその存在がしられ、明治年間には学会への報文の提出がある。宗光寺横穴群もその中で「田中の横穴群」として紹介されている。伊豆の横穴群に対する調査は昭和20年代以降本格化する。一連の調査により、伊豆の横穴は古墳時代の終末期から奈良時代に造営の盛期があることが判明し、古墳の終焉の状況、石櫃からうかがえる地方への火葬の普及、地方豪族と中央とのつながりなどに特色を持つことが明らかとなった。なお、伊豆の横穴の調査には、高名な研究者も多くかかわっている。学界において周知されたものといえよう。私自身も、「若舎人」銘が陰刻された石櫃の出土によって知られる大北横穴群の調査に携わっており、伊豆の国市は個人的にも思い出深い地である。

宗光寺横穴群も過去に３回の調査が行われている。特筆すべきは、石櫃の存在である。石櫃を保有する横穴は、狩野川の東側ではこの横穴群のみである。さらに、注目できるのは、遺跡の南西約300ｍには、古代寺院である宗光寺廃寺が存在することである。今でこそ、鄙びたこの地も当時は、仏教を積極的に取り入れた先進的な有力者がいたことが想起される。宗光寺横穴群の被葬者との関連性も十分に考えてよいだろう。なお、現地には今なお、横穴が残されている。一度、この地を訪れ、過去に思いを廻らすことを、お勧めしたい。

今回の現地調査ならびに、資料整理にあたっては、静岡県沼津土木事務所、伊豆の国市教育委員会、静岡県教育委員会、宗光寺地区自治会等の関係機関各位に、多大な御理解と御協力をいただいた。また、多くの方々からは調査を通じて、有益な御指導、御助言を賜った。文末ではあるが、ここに記して感謝の意を示すとともに、現地調査と資料整理に携わった作業員諸氏の労をねぎらい結びの言葉といたす次第である。

平成19年12月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　　斎　藤　　忠

例　言

1　本書は、静岡県伊豆の国市宗光寺654他に所在する宗光寺横穴群と同市宗光寺字横山段に所在する横山段横穴群の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成19年度横山段急傾斜地崩壊対策（公共関連一大規模）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県沼津土木事務所の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3　調査の期間は平成19年６月１日～12月25日である。調査対象面積は680㎡である。このうち、平成19年６月１日～９月５日が現地調査、９月６日～12月25日までが整理作業である。

4　調査体制は下記のとおりである。

所長　斎藤　忠

事務局長　清水　哲

事務局次長兼総務課長　大場正夫　　事務局次長兼調査課長　及川　司

事務局次長　佐野五十三　　事務局次長　稲葉保幸

調査課東部調査一係長　中鉢賢治　　調査研究員　菊池吉修

主事　望月高史

5　現地での基準点測量、空中写真撮影は株式会社デジックに委託した。

6　遺構実測図・遺物実測図の縮尺は図に示したとおりである。

7　座標は、平面直角座標Ⅷ系を用いた世界測地系を使用している。

8　方位は、平面直角座標Ⅷによる方位（座標北）を基準として表示している。

9　調査にあたって、調査区内には国家座標に基づき、一辺10ｍのグリッドを設定した。なお、グリッドは南北方向についてはアルファベット、東西方向についてはアラビア数字を用い、北西隅の交点を持ってそのグリッドの名称とした。

10　土層の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

11　本書で使用した地図は、国土地理院発刊1：25,000地形図「韮山」等を複写して加筆・加工した。

12　本書の執筆は菊池吉修が行った。

13　本書の編集は財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

14　発掘資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

目　次

序
例言

第１章　経過
　　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の環境
　　第１節　地理的環境 …… 3
　　第２節　歴史的環境と調査歴 …… 4

第３章　調査の成果
　　第１節　概要 …… 6
　　第２節　調査の方法 …… 7
　　第３節　基本層序 …… 8
　　第４節　宗光寺横穴群 …… 9
　　第５節　横山段横穴群 …… 13

第４章　総括 …… 16

図版
報告書抄録

挿図目次

図１　伊豆の国市と遺跡の位置 …… 1
図２　周辺遺跡の分布図 …… 4
図３　調査範囲と遺跡範囲 …… 6
図４　基本層序柱状図 …… 8
図５　宗光寺横穴群調査範囲 …… 9
図６　宗光寺横穴群グリッド配置図 …… 10
図７　１区全体図 …… 10
図８　１区・２区調査区南側断面模式図 …… 10
図９　５号横穴展開図 …… 11
図10　６号横穴展開図 …… 11
図11　宗光寺横穴群横穴状遺構展開図 …… 12
図12　横山段横穴群調査範囲 …… 14
図13　横山段横穴群横穴状遺構と周辺の地形 …… 14
図14　横山段横穴状遺構展開図 …… 15
図15　宗光寺横穴分布図 …… 16
図16　中央支群西半の横穴分布状況 …… 17

挿表目次

表１　調査工程表 …… 3
表２　周辺の古墳・横穴一覧 …… 4

図版目次

図版１　宗光寺横穴群
　１　遺跡遠景（南東から）
　２　調査区遠景（南から）
図版２　宗光寺横穴群
　１　１区全景（南から）
　２　５号横穴遺存状況（南から）
図版３　宗光寺横穴群
　１　６号横穴遺存状況（南から）
　２　横穴状遺構開口部と西壁（南東から）
図版４　宗光寺横穴群
　１　２区全景（東から）
　２　３区西側トレンチ東半部（東から）
　３　３区西側トレンチ西半部（東から）
図版５　宗光寺横穴群
　１　５区全景（南東から）
　２　３区東側トレンチ全景（東から）
　３　周囲に現存する横穴１
　　（４号横穴　南東から）
　４　周囲に現存する横穴２
　　（７号横穴　南東から）
図版６　横山段横穴群
　１　調査区全景（北西から）
　２　横穴状遺構全景（南西から）
　３　横穴状遺構左壁（西から）
　４　横穴状遺構右壁（南から）

第１章　経　過

第１節　調査に至る経緯

宗光寺横穴群・横山段横穴群は静岡県伊豆の国市宗光寺に所在する。このうち、宗光寺横穴群は、昭和20年代以降、３回の調査が実施されている。これらの調査で、古墳時代終末期～奈良時代に位置付けられる19基の横穴の存在が確認され、既に破壊されている横穴も含めれば、その総数は30基程度の横穴群であったと推測されている。いっぽう、横山段横穴群は、これまでに調査が実施されていないため、総数を含め実態には不明な点が多い。ただし、周辺遺跡の事例から、宗光寺横穴群とほぼ同時期の所産と推測される横穴群である。

このたび、静岡県沼津土木事務所により、宗光寺地区に対して急傾斜地崩壊対策の工事が計画された。工事対象範囲の一部は、宗光寺横穴群・横山段横穴群の遺跡範囲と重複するものであった。この工事計画を受け、伊豆の国市教育委員会と静岡県教育委員会により、平成18年度に現地踏査を行ったところ、宗光寺横穴群は既に開口している横穴に加え、さらなる未発見の横穴が存在する可能性と、横穴の分布域がさらに広がる可能性が指摘されるに至った。

この成果を基に、平成18年度、静岡県沼津土木事務所と静岡県教育委員会文化課が遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、平成19年度の工事予定範囲と重複する周知の遺跡範囲と、踏査により遺跡の広がる可能性が指摘された範囲については、平成19年度中に発掘調査を実施することが決定した。また、平成19年度の工事予定範囲には含まれないものの、調査と工事の効率を上げることを目的に、横山段横穴群の一部についても、合わせて調査を実施することも決定した。上記２件の調査対象面積は586㎡であり、このうち宗光寺横穴群が362㎡、横山段横穴群が224㎡である。

調査は静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。現地調査は平成19年６月１日から平成19年８月20日まで実施した。調査期間中、本体工事の設計変更に伴い、調査範囲を北側に拡張する必要性が新たに生じたため、北側の94㎡についても、引き続き調査を行った。この部分の調査は、平成19年８月20日から平成19年９月５日まで実施した。これにより、平成19年度における宗光寺横穴群の調査対象面積の合計は456㎡、調査面積の総計は680㎡となった。

現地調査に続いて、整理作業を実施した。整理作業は平成19年９月６日から平成19年12月25日まで行い、本書の刊行をもって平成19年度における宗光寺横穴群・横山段横穴群の発掘調査を終了した。

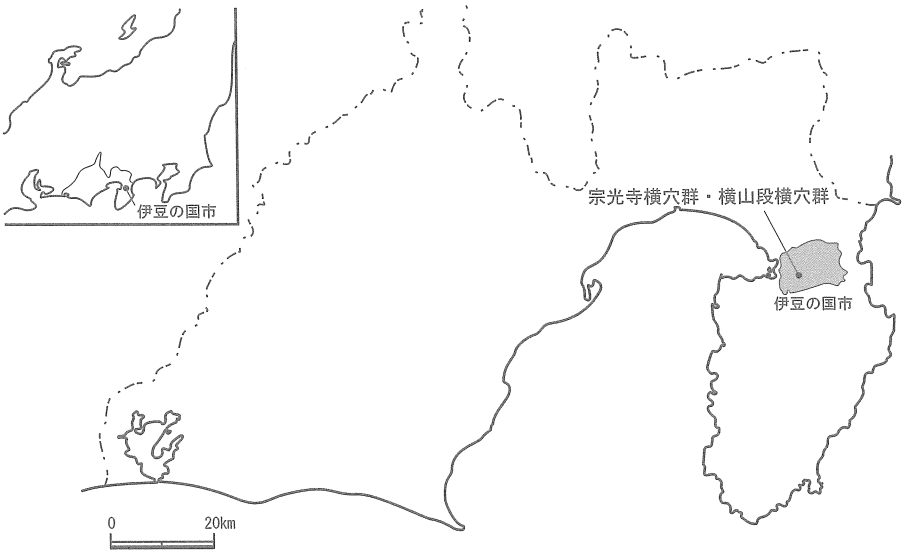


図１　伊豆の国市と遺跡の位置

第２節　調査の経過

平成19年度の宗光寺横穴群・横山段横穴群の調査は、６月１日から９月５日まで現地調査、９月６日から12月25日まで整理作業を実施した。

１　現地調査

現地調査は平成19年６月１日から９月５日まで実施した。調査は、地形と本体工事の工程の関係から、調査対象範囲を５つの区に分けて行った。このうち、１～３区と５区が宗光寺横穴群、４区が横山段横穴群に相当する。なお、５区は１～４区の調査中、新たに加わった調査対象範囲である。

現地調査は始めに、準備工として現地事務所の設営と作業用足場・調査区内への落石防止柵の設置作業を実施した。なお、現地調査に先立ち５月８日から、届出等の関係書類の作成作業を実施している。

上記の作業を終えた６月19日、１区の表土除去から発掘調査に着手した。６月20日には、表土を除去した部分から、遺構の検出作業を開始し、３基の横穴状遺構の存在が明らかとなった。遺構の検出を終えた６月25日からは、遺構覆土の掘削と地形測量作業に着手した。６月28日には、１区の表土除去作業と遺構覆土の掘削が完了し、写真撮影を実施した。地形測量は、６月29日に終了し、７月３日からは検出遺構の実測作業を行った。遺構実測は７月６日に終了し、これをもって１区の調査を終えた。なお、６月20日には、調査区全体の測量用基準杭の設置を行っている。

１区の調査と併行して、７月３日から３区の調査に着手した。３区の調査はトレンチ掘削により実施した。掘削終了範囲から実測図の作成と写真撮影を行った。掘削作業は７月10日まで行い、実測作業と写真撮影を終了した７月19日をもって３区の調査を終了した。３区の調査とあわせ、７月９日から２区の表土除去作業に取りかかった。表土除去作業は、８月２日まで実施した。実測作業と写真撮影は７月24日から開始し、断続的に８月６日まで行った。８月７日に完掘状況の写真撮影を行い、２区の調査を終えた。調査の結果、１区で検出した３基の横穴状遺構のうち、２基は古墳時代後期～奈良時代初頭の所産であるが、１基は現代に掘削されたものであることが判明した。２区からは、近世の陶磁器片が出土したが、遺構の発見には至らなかった。３区では、遺構・遺物ともに発見できなかった。

４区の横山段横穴群の調査は、８月２日に着手前状況の記録撮影から開始した。掘削作業は８月７日と８日に実施し、写真撮影も８日に行った。実測作業は、９日・10日・13日に実施し、８月20日に埋め戻しを行い、横山段横穴群の調査を終えた。４区では１基の横穴状遺構を検出したが、調査の結果と近隣住民からの聞き取りにより、現代の所産であることが判明した。

８月20日からは、新たに調査対象範囲に加わった５区の調査を開始した。掘削作業は、８月22日には終わり、８月24日には、写真撮影を行った。実測作業は、掘削作業と併行して実施し、８月29日に埋め戻しを行い、調査を終了した。５区の調査では遺構・遺物の発見には至らなかった。なお、８月27日には、ラジコンヘリを用いて空中写真撮影を行った。

現地調査をほぼ終了した８月24日からは撤収作業を開始し、９月４日の県沼津土木事務所と県教委文化課による現地掘削完了状況の確認を経て、９月５日に撤収作業を終え、現地調査を完了した。

２　整理作業

記録類を中心とした整理作業を、平成19年９月６日から12月25日まで㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所本部にて実施した。平成19年12月25日、本書の刊行をもって平成19年度における宗光寺横穴群・横山段横穴群の作業を全て完了した。

第２章　遺跡の環境

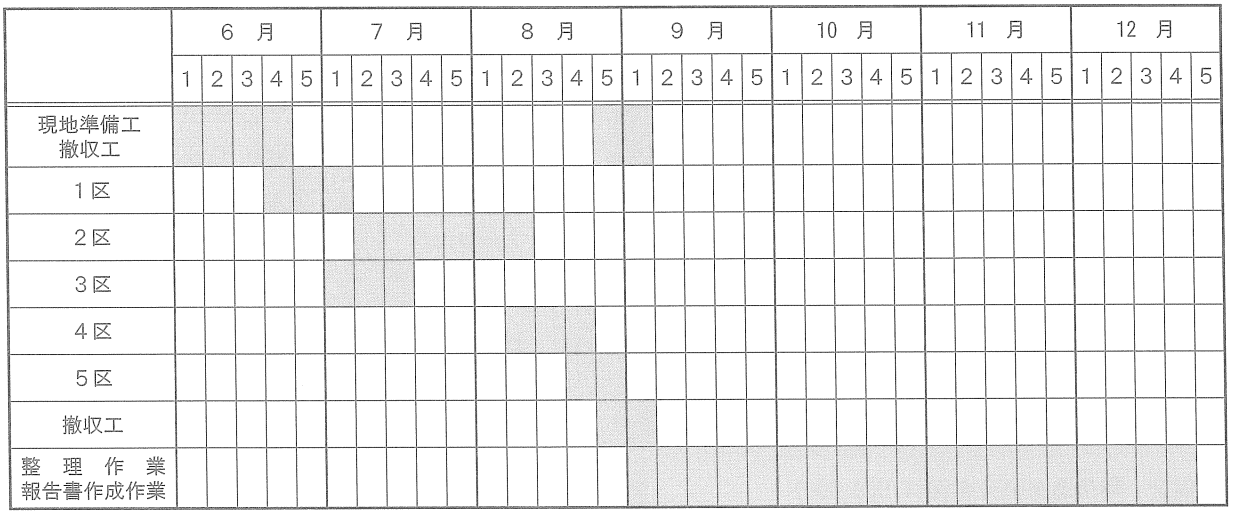
第１節　地理的環境

宗光寺横穴群・横山段横穴群は、伊豆の国市宗光寺に所在する横穴群である。伊豆の国市は、伊豆半島北部の田方郡韮山町・伊豆長岡町・大仁町が合併し、平成16年に誕生した市である。遺跡が所在する宗光寺地区は、伊豆の国市のほぼ中央に位置し、合併前は大仁町の町域であった。

伊豆の国市は市域の中央部に天城連山を水源とする狩野川が北流し、流域には沖積平野である田方平野が広がる。平野の東西、そして南側には峰々が連なり、これらの山塊から派生した丘陵が狩野川流域に向かいのびている。宗光寺地区は、狩野川の東岸にあり、市域東側の山塊から西にむけて派生した丘陵が地区の南と北を限る。地区の中央には、狩野川の支流である宗光寺川が西流し、狭隘ながらも沖積平野を形成している。宗光寺横穴群・横山段横穴群は、宗光寺地区の北側を限る丘陵の裾部から中腹に展開する。このうち、横山段横穴群は、丘陵の西南端部付近にあり、伊豆箱根登山鉄道伊豆長岡駅からは、南に約1.3kmの距離である。宗光寺横穴群は、横山段横穴群の東側約0.3kmに所在し、伊豆長岡駅からは南南東に約1.4kmの距離である。横穴群の標高は、宗光寺横穴群が約20～30m、横山段横穴群が約20mである。宗光寺川周辺との比高差は５～20m前後である。宗光寺横穴群からは、宗光寺川下流域が一望でき、横山段横穴群からは、宗光寺川と狩野川合流域近辺を眺望できる。

宗光寺横穴群・横山段横穴群が展開する丘陵は、表土の直下が凝灰岩層となっている箇所、角礫岩層あるいは角礫凝灰岩層となっている箇所、礫を含んだ堆積層が広がっている箇所、さらに凝灰岩層や角礫凝灰岩層が露頭している箇所が見られる。宗光寺横穴群は凝灰岩を穿って横穴が造られており、横山段横穴群においては、横穴は角礫凝灰岩層に掘り込まれている。今回の調査範囲のうち、宗光寺横穴群においては調査対象範囲の西側約1/3が表土の直下に角礫岩層、中央部の1/3が表土の直下が礫を含んだ堆積層、東側の約1/3が表土の直下が凝灰岩層であった。横山段横穴群においては、角礫凝灰岩層が露頭していた。なお、宗光寺横穴群が築かれる凝灰岩層は、静浦層群の長岡凝灰岩層と呼ばれる層位に相当する（伊豆長岡町1981）。この凝灰岩層は、風化部分は茶褐色を呈しているが、本来的には、緑色～青灰色を帯びた白色の層位であることが調査区内でも確認できた。安山岩を含む角礫凝灰岩層はこの凝灰岩層の上位の層と捉えられる。

表１　調査工程表



第２節　歴史的環境と調査歴

１．歴史的環境

宗光寺横穴群・横山段横穴群の所在する伊豆の国市は、弥生時代の山木遺跡、古墳時代終末期～奈良時代の北江間横穴群、中世初頭の源氏・北条氏関連の史跡、江戸時代末の韮山反射炉など、静岡県を代表する史跡を多く持つ。これらの史跡が物語る如く、伊豆の国市は歴史と縁が深い。遺跡周辺の歴史を叙述するだけでも、相当の紙面を要する。そこで、ここでは宗光寺横穴群・横山段横穴群が造営された古墳時代を中心に、古墳や横穴から当地の歴史的環境を記すこととする。

伊豆の国市では、中期後半に至るまで古墳の存在は確認されていない。ただし、視野を少し広げると、前期の所産と考えられる前方後円墳が、近年、三島市の向山古墳群で発見されている。伊豆の国市においても同時期まで遡る古墳が、発見される可能性はあるだろう。

伊豆の国市において、確認し得る限り最も古い古墳は、大塚古墳群（多田大塚古墳群）の４号墳である。大塚古墳群では中期後半に位置付けられる４号墳に続けて、６世紀初頭に６号墳、６世紀前葉に１号墳が築造される。このうち、４号墳からは横剥板鋲留短甲や古式のｆ字形鏡板付轡が出土し、埴輪を持つ６号墳からは剣菱形杏葉を始めとする金銅装の馬具が出土している。いずれも、伊豆では唯一の出土例である。これらの副葬品から、大塚古墳群は被葬者集団の優位性がうかがえ、県東部においては、三島市の向山古墳群とともに注目をされる古墳群である。後期前葉には、前方後円墳も築かれる。狩野川西岸に所在する駒形１号墳（34）は全長約50ｍの前方後円墳で、大塚６号墳と類似した人物埴輪が出土している。なお、この時期の墓制を考える上で、看過することができないのは、笠石山洞穴である。中期末～後期初頭に位置付けられるこの遺跡は、洞穴墓の可能性が指摘され（滝沢2005）、伊豆における古墳時代の洞穴墓の淵源に一石を投じる遺跡である。

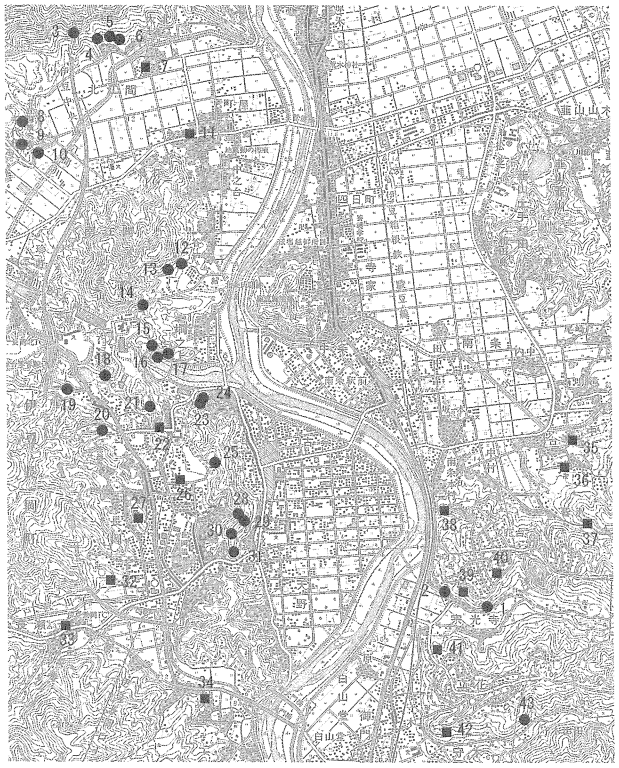


図２　周辺遺跡の分布図(1/500,000)

表２　周辺の古墳・横穴一覧

1	宗光寺横穴群	横穴	23	谷戸洞横穴群	横穴
2	横山段横穴群	横穴	24	鏡池横穴群	横穴
3	大北西横穴群	横穴	25	弥勒堂横穴群	横穴
4	大北横穴群	横穴	26	田端古墳群	古墳
5	大北東横穴群	横穴	27	別所古墳群	古墳
6	大嵐横穴群	横穴	28	細洞横穴群	横穴
7	箱根山古墳群	古墳	29	万法院横穴群	横穴
8	横根沢横穴群	横穴	30	多門山横穴群	横穴
9	割山横穴群	横穴	31	岩鼻横穴群	横穴
10	大師山横穴群	横穴	32	丸山古墳群	古墳
11	豆塚古墳	古墳	33	長瀬古墳群	古墳
12	桜ヶ平Ａ横穴群	横穴	34	駒形古墳群	古墳（前方後円墳１基）
13	桜ヶ平Ｂ横穴群	横穴			
14	男山横穴群	横穴	35	台古墳群Ａ群	古墳
15	入山横穴群	横穴	36	台古墳群Ｂ群	古墳
16	堀之上Ａ横穴群	横穴	37	皆沢日向古墳	古墳
17	子之神横穴群	横穴	38	犬間洞古墳群	古墳
18	上耕地山横穴群	横穴	39	横山段古墳群	古墳
19	花坂横穴	横穴	40	富士見夫婦塚古墳群	古墳
20	竹ノ鼻横穴群	横穴	41	神明塚古墳	古墳
21	白坂山横穴	横穴	42	平石古墳群	古墳
22	洞古墳	古墳	43	守木横穴群	横穴

当地において、古墳の造営が最も盛んになるのは、後期後半からである。この地域の特徴の一つが横穴と横穴式石室墳が併存することにある。ともに６世紀後半に伊豆に導入されるが、その消長には違いがみられる。横穴式石室墳は６世紀後半に導入された後、７世紀代を通じて築造が続けられる。しかし、他地域でみられるような著しい増加はみせず、田方平野周辺では多くても10基程度からなる古墳群が形成されるに留まる。代表的な古墳群としては、導入期の横穴式石室を持つ箱根山古墳群（７）、長瀬古墳群（33）があげられる。いっぽう、横穴群は函南町柏谷横穴群で６世紀後半に導入された後、７世紀後半以降に爆発的な増加をし、その総数は横穴式石室墳を大きく上回る。特に、伊豆の国市では、造営の最盛期は７世紀末葉～８世紀前半にある。大北横穴群（４）・大師山横穴群（10）はその典型である。なお、両者を含めた一帯の横穴群は、北江間横穴群と総称される。宗光寺横穴群は、これらに比べると、造営の開始時期が早いようである。

伊豆の国市の横穴群が持つ最大の特徴は、火葬骨を納めた石櫃の存在である。大北（４）・大北東（５）・割山（９）・桜ヶ平Ａ（12）・万法院（29）・宗光寺（１）横穴群で、合計29例の石櫃が確認されている。なかでも「若舎人」銘の陰刻を持つ大北24号横穴出土の石櫃は最も著名なものであろう。宗光寺横穴群は、狩野川東岸においては唯一の石櫃出土例である。石櫃以外にも、蔵骨器や、いわゆるミニ横穴など火葬との関わりを持つものが当地の横穴群では発見されている。これらの横穴群は、概ね８世紀前半に位置付けられ、横穴を造営した集団がいち早く火葬を取り入れたことがいえるとともに、「若舎人」銘に示されるように律令政権と強い結びつきを持っていたことがうかがえる。特に宗光寺横穴群は、遺跡の南西約300ｍに７世紀後半～８世紀とされる宗光寺跡があり、仏教との関連性も指摘されている。

なお、大師山横穴群では、家形石棺も発見されている。家形石棺は、横穴式石室墳である平石４号墳（42）にもみられる。また、「白石の石棺」と称される洞古墳（22）の石棺は、県下でも最大級の巨大な家形石棺である。もっとも、形態的な差異が著しいため、３者を結びつけることはできないが、家形石棺の存在も当地の特徴の一つといえる。なお、これらの家形石棺や石櫃は、凝灰岩製である。横穴の存在とあわせ、当地に凝灰岩を加工する技術を持った集団がいたことがいえよう。

２．調査歴

宗光寺横穴群は、これまでに数回の調査が実施されている。代表的な調査としては、1947年、1957年、1985年の調査があげられる。もっとも、存在自体は「宗光寺百穴」として古くから知られ、『増訂豆州志稿』にも記載がみられる。また、1901年には14基の横穴が存在することが学会に紹介されている（松下1901）。

本格的な発掘調査の端緒となるのは1947年に長田実・大川清が中心となって行った調査である。この調査では、火葬骨を納めた石櫃が発見されている（長田1951）。伊豆において、石櫃が火葬骨を納めたものであることを確認した初例となる調査であることは注目できよう。なお、石櫃は17号横穴からの出土ともいわれているが、定かではない。

1957年の調査では、中川成夫・岡本勇が中心となり、４基の横穴が調査されている（中川・岡本1966）。1985年には、静岡県教育委員会が主体となり、分布調査と３・４・７～14・17・19号横穴の略測調査が行われている。この調査では、開口する19基の横穴の残存が確認されている（静岡県教育委員会1986）。なお、今回の調査に先立つ踏査において、従来想定されていた分布域より、さらに西方において新たな横穴も１基発見されている。本来的には、30基を越える横穴が存在した可能性も指摘されており（静岡県教育委員会1986）、この他にも未発見の横穴が存在する可能性は高い。なお、この他、軽部慈恩・鈴木尚を中心とした調査が1953年に（漆畑1973）、軽部・中川・鈴木尚が中心となった調査が1955年に実施されている（軽部・尾形1965）。

第３章　調査の成果

第１節　概　要

680㎡を対象として実施した今回の宗光寺横穴群・横山段横穴群の本調査では、宗光寺横穴群において、２基の横穴と１基の横穴状遺構を検出し、横山段横穴群では１基の横穴状遺構を検出した。このうち、宗光寺横穴群で検出した２基の横穴は、副葬品などを伴わなかったものの、周辺の事例から古墳時代後期から奈良時代初頭のものと考えられる。いっぽう、宗光寺横穴群と横山段横穴群でそれぞれ１基検出した横穴状遺構は、その形状が周囲の横穴と異なる点と、近隣住民の話から、戦時中に掘削された防空壕等の可能性が高いと考えられる。次に、遺跡別に調査の概要を記す。

１．宗光寺横穴群

宗光寺横穴群は、過去に数度の調査が実施され、古墳時代後期から奈良時代初頭にかけての横穴が19基存在することが判明している。平成19年度の調査では、宗光寺横穴群として周知されている遺跡範囲のうち、西寄りにあたる456㎡を対象とした。調査の結果、２基の横穴と防空壕跡あるいは貯蔵穴と考えられる横穴状遺構１基を検出した。このうち、２基の横穴は過去の調査において、５号横穴・６号横穴として既に存在が明らかとなっていたものである。両者とも残存状況は決して良好とはいえず、ともに天井部は破壊され、奥壁付近の床面と側壁の一部が遺存する程度であった。また、表面の風化も著しかった。

横穴やその周辺からの遺物の出土はなく、わずかに表土から近世の陶磁器片が出土したのみである。２基の横穴の時期を特定することは困難であるが、宗光寺横穴群における他の横穴と同様に、古墳時代後期から奈良時代初頭の所産と考えられる。

２．横山段横穴群

横山段横穴群は、近年新たに確認された横穴群であり、これまで調査が行われたことはなかった。今回、224㎡を対象として実施した調査では、防空壕跡と考えられる１基の遺構を検出した。

遺構内には、多数の礫が充填されていたが、この遺構に直接伴う、遺物等は発見できなかった。

図３　調査範囲と遺跡範囲(1/5,000)

第２節　調査の方法

１．現地調査

平成19年度の宗光寺横穴群・横山段横穴群の現地調査は、平成19年６月１日から９月５日まで実施した。調査対象面積の合計は680㎡、実掘削面積は88.6㎡である。調査にあたっては、地形と本体工事の工程の関係から、調査区を５つに分けて実施した。このうち、１～３区と５区が宗光寺横穴群、４区が横山段横穴群に相当する。なお、上記の面積のうち、456㎡が宗光寺横穴群の調査対象面積である。宗光寺横穴群の調査は、事前の踏査により遺構が遺存する可能性が高いと指摘された１区と２区は、全面を掘削したが、３区と５区はトレンチ掘削による調査である。いっぽう、横山段横穴群は、244㎡が調査対象面積であるが、表土等の掘削は行わず、周辺の清掃と遺構覆土の掘削のみを実施した。

宗光寺横穴群の調査にあたっては、世界測地系第Ⅷ系に則して、10m幅のグリッドを設定した。グリッドは北西端部を基点とし、南北方向はアルファベット、東西方向はアラビア数字を付した。グリッド名は、北西交点を使用している。また、安全確保のため、調査対象範囲の斜面上方には、調査区内への落石防止柵を設置し、調査区内には作業用足場を設置し、調査にあたった。

宗光寺横穴群・横山段横穴群ともに、掘削作業は、全て人力で行った。１～３区の掘削により生じた排土処はバックフォーとダンプを用いて場外に搬出した。４区と５区は、掘削により生じた排土を用いて、調査終了後に埋め戻し作業を行っている。

測量作業は、調査区内に３級・４級基準点を設置し、この基準点を基にトータルステーションとレベルを用いて、縮尺1/20と1/100を基本として実施した。また、全体写真と景観写真の撮影は、ラジコンヘリを用い、６×６判のモノクロフィルムとカラーポジフィルムを使用した。その他の撮影は、35㎜判のカラーネガフィルム・カラーポジフィルム、６×７判のモノクロフィルムとカラーポジフィルムを使用した。なお、測量用基準点の設置ならびに空中写真撮影は株式会社デジックに委託した。

２．整理作業

整理作業については、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所本部にて実施した。作業期間は平成19年９月６日から12月25日までである。整理作業は、遺構等の記録類に関わる作業を中心に行った。遺構図や全体図は、現地で作成した図面をもとに、版組を行った上で、トレース作業を実施した。これらの作業と併行して、報告書の執筆と編集作業を行った。上記の作業が全て終了した時点で収納作業を実施した。

整理作業の状況

宗光寺横穴群（１区）調査状況

第３節　基本層序

宗光寺横穴群・横山段横穴群の基本層序は図４のとおりである。ただし、斜面地であるため、調査対象範囲内全てにおいて、この層序をなしていたのではない。角礫凝灰岩や、第５層の凝灰岩が露頭し、表土が存在しなかった箇所もある。層序は、おおむね地区単位で異なる。この基本層序は地点ごとの層序を基に統合したものである。次に、基本層序の概要を記す。

まず、第１層である表土層の下層となるのが、暗褐色系の粘土層群である。この粘土層群は、大小の礫を含み、その多寡により細分ができる。尾根部では薄く、谷部では厚い層位であり、時期を特定できないものの、堆積層と捉えられる。暗褐色系の粘土層群の下層となるのが、角礫岩層である。角礫岩層の下位が角礫凝灰岩層、その下層が、宗光寺横穴群で横穴が穿たれる凝灰岩層である。

第１層　第１層は表土である。この層の厚さは、５～50㎝程度である。２区では、近世陶磁器片が出土しているが、他には遺物が出土しなかった。

第２層　暗褐色粘土層である。１区の西半と２区の東端部、５区に広がる。直径５㎝前後の礫を非常に多く含み、最大で1m程度の厚さを持つ層位である。出土遺物はなかった。横穴との前後関係は断定できないものの、横穴構築以前の斜面崩落に伴う堆積層と推測される。

第３層　暗褐色粘土層である。５～30㎝前後の礫を含む層位で、礫の多寡とその大きさにより、細分が可能である。１区～３区、５区で確認でき、遺物は出土しなかったものの、少なくとも古墳時代以前のかなり古い段階の、斜面崩落時の堆積層と捉えられる。厚さは最大で３ｍ程度ある。

第４層　角礫岩層である。取り込まれる石材は、安山岩である。第３層以上との、接触面においては、この層位の風化層が見られ、宗光寺横穴群では、２区の西半から３区にかけて広がっていた。青灰色を呈し、風化面は褐色を呈する層位である。なお、４区の横山段横穴群で横穴が掘り込まれているのは、青灰色を呈する角礫凝灰岩層である。角礫凝灰岩層は、この第４層と第５層の中間層位にあたる。ただし、調査区内では、この層序を追認することはできなかった。

第５層　凝灰岩層である。宗光寺横穴群において、横穴が掘られるのは、この凝灰岩層である。宗光寺横穴群とその周辺でみられる凝灰岩と第４層の角礫岩は、静浦層群中の長岡凝灰岩層に相当する。長岡凝灰岩層の特徴は、その色調が青灰色、あるいは緑～緑濃色を帯びた白色にあり、風化すると茶褐色を呈することにある。調査区内においても、その色調の特徴は確認することができた。調査区内では１区と、２区の一部にのみ広がっている層位である。

なお、地区別にみると、１区では、第１層～第２層・第５層が確認でき、２区では第１～５層、３区では第１層・第３層・第４層、５区では第１～３層が確認できた。いっぽう、横山段横穴群である４区では、角礫凝灰岩層が露頭しており、部分的にごくうすい表土が見られる程度であった。

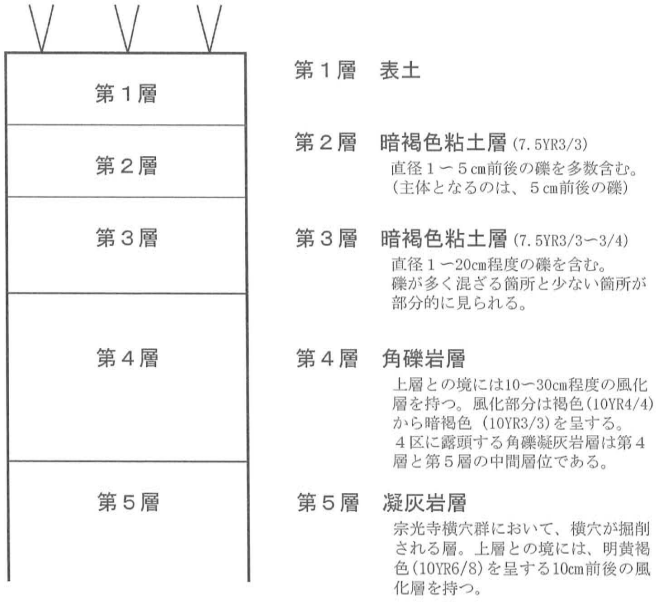


図４　基本層序柱状図

第４節　宗光寺横穴群

１．概要

（１）全体の概要

宗光寺横穴群は、今回の調査では１～３区と５区が該当する。このうち、１区と２区が全面調査、３区と５区がトレンチ調査であった。調査対象面積は456㎡、実掘削表面積は71㎡である。

今回の調査では、２基の横穴と１基の横穴状遺構を発見・調査した。このうち、２基の横穴は、1985年に実施された調査において、その存在が既に明らかとなっている宗光寺５号横穴・６号横穴である。ともに、上部から開口部付近の大半が破壊されており、遺物も出土しなかった。横穴状遺構は、５号横穴・６号横穴が破壊された後に、掘削されている。近隣住民の話を統合すると、この遺構は、防空壕跡あるいは貯蔵穴と考えられる。この遺構も遺物は出土しなかった。なお、今回の調査においては、遺物は２区において、表土から近世陶磁器の細片が出土したに留まる。出土位置の近辺には、調査着手前、稲荷大明神を祀った祠があった。出土した近世陶磁器片は、これに供えられたものであったと考えられる。次に地区別の調査概要を記す。ただし、４区は横山段横穴群に相当し、その状況は次節に記す。

（２）地区別概要

１区　１区は南東部に位置する調査区である。今回の調査では、この調査区においてのみ、遺構を検出できた。検出した遺構は、上述したとおり横穴２基と横穴状遺構１基である（図７）。この調査区は、表土の直下が凝灰岩となっており、表土を除去したところで遺構を検出することができた。

２区　２区は、調査対象範囲中央部に位置する調査区であり、東に１区、西に３区、北が５区に接する。２区では、横穴が構築される凝灰岩の分布が東端部に限られ、中央部は厚い褐色系の粘土層であった。西端部は表土の直下が30～50㎝程度の厚さを持つ褐色系の粘土層で、その下部は角礫岩層となっていた。この地質的な要因のため、２区では横穴や横穴状遺構等の検出には至らなかった。ただし、中央部の表土から近世陶磁器の細片が出土している。

３区　３区は、西端部の調査区である。この調査区は、トレンチ掘削による調査を実施した。トレン

図５　宗光寺横穴群調査範囲(1/500)

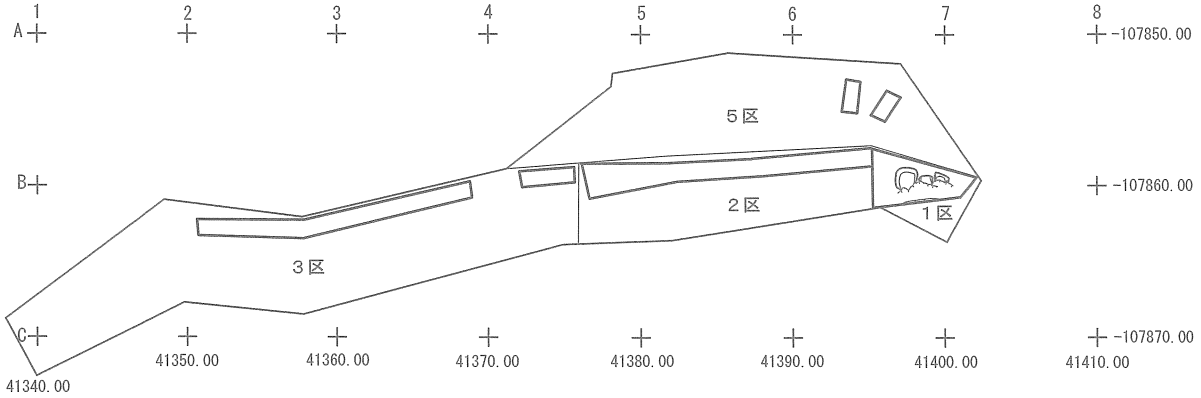


図６　宗光寺横穴群グリッド配置図(1/500)

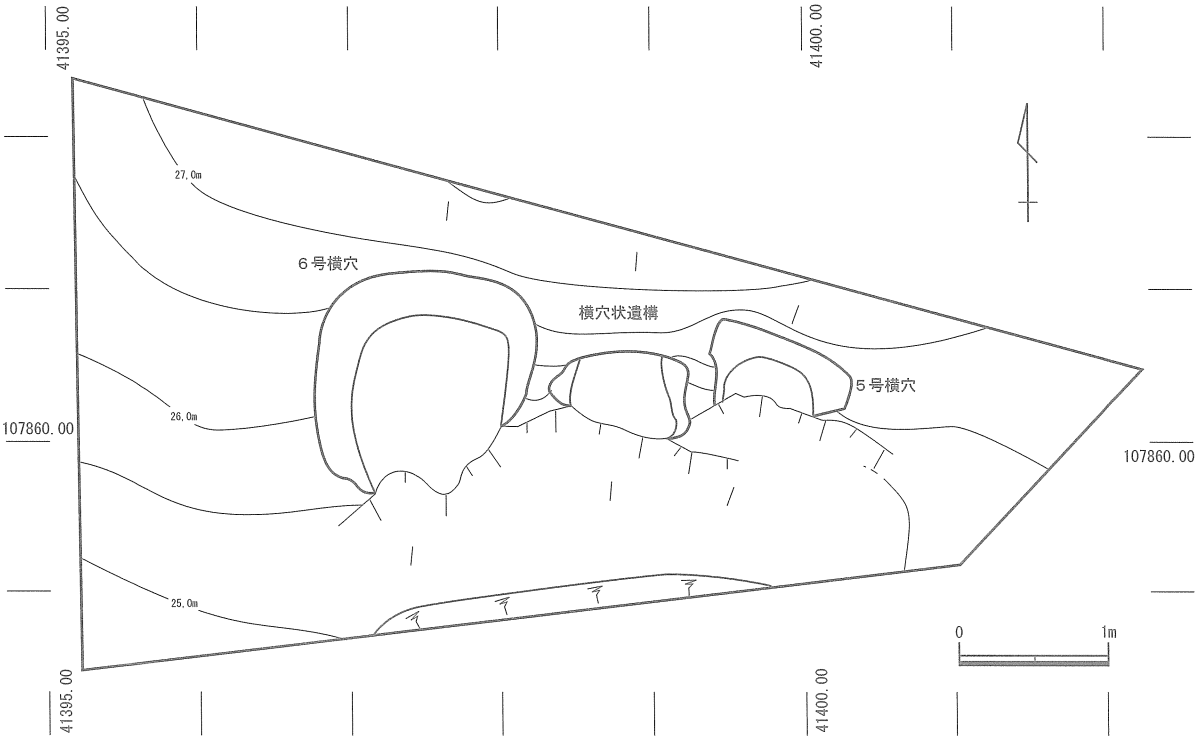


図７　１区全体図(1/50)

チ掘削により、この調査区は、50～100cm前後の厚さを持つ褐色系の粘土層の下部に角礫岩層が広がっていることが明らかとなり、横穴が存在し得ない地質であることが判明した。遺物等の出土もなかったため、３区はトレンチ掘削のみで調査を終了した。

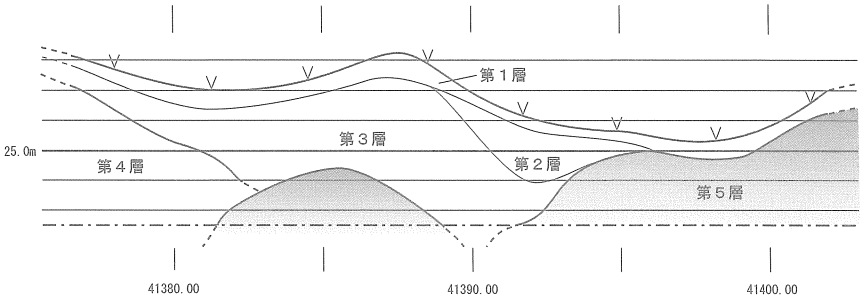


図８　１区・２区調査区南側断面模式図(1/250)

５区　５区は、１区から２区の北側に位置する調査区である。５区もトレンチ掘削により、調査を実施した。掘削により、５区は２区から続く褐色系の粘土層が広がっていることが判明し、横穴や横穴状の遺構は存在し得ない地質であることが明らかとなった。なお、１区と接する近辺は凝灰岩層が広がっており、当該範囲の清掃を行ったが、新たな横穴を発見することはできなかった。

３．遺構

（１）５号横穴（図９）

位置と残存状況　５号横穴は、１区の東寄りで検出し、西は横穴状遺構が接する。この遺構は、奥壁、ならびにその付近の床面と左右の側壁のごく一部が遺存したのみである。また、表面の風化が著しく、残存した部位も、築造当初の状況を示しているとはいえず、鑿痕等は一切確認できなかった。

規模と形状　上述したとおりの残存状況であるため、本来的な形態を把握することはできない。ただし、残存部位から平面形は長方形あるいは開口部に向かい幅を狭める長台形の可能性が考えられる。

床面の残存長は0.46m、残存高1.06mである。幅は奥壁床面が0.58mであるが、これより約0.6m上方では0.96mである。もっとも、風化が著しく、上記の数値が当初の奥壁規模を示すものとはいえない。なお、主軸方位は概ねN-20°-Eであり、南に開口する。この横穴からの出土遺物はなかった。

（２）６号横穴（図10）

位置と残存状況　６号横穴は、１区の西寄りで検出した。東は後述する横穴状遺構に接する。５号横穴同様に、奥壁とその近辺の床面や側壁の一部の残存に留まる。また、表面の風化も同様に著しく、築造時の状況を残すものとはいい難い。

規模と形状　形状は、上記のとおりの残存状況であるため、平面形が長方形あるいは開口部に向かって幅を狭める長台形の可能性が想定されるにすぎない。

残存高は1.34m、床面の残存長は1.12mである。奥壁幅は床面直上では1.00m、最大幅は1.44mであるが、後世の破壊の影響を受け、本来の規模を示すものではないようである。なお、この６号横穴は南に開口するものと考えられ、主軸方位はN-6°-Eと推定される。また、５号横穴と同様に出土遺物はなかった。

（３）横穴状遺構（図11）

位置と残存状況　この遺構は１区の中央に位置し、東に５号横穴、西に６号横穴が隣接する。天井部が遺存したものの、開口部付近は削られていた。

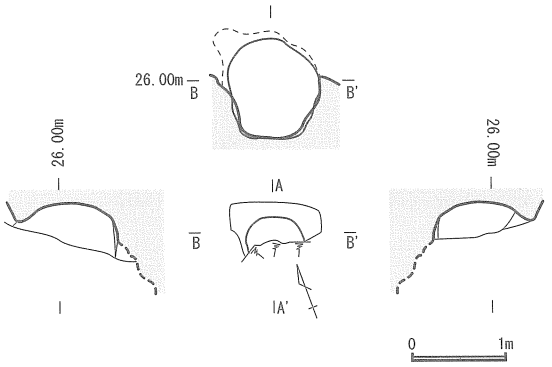


図９　５号横穴展開図(1/80)

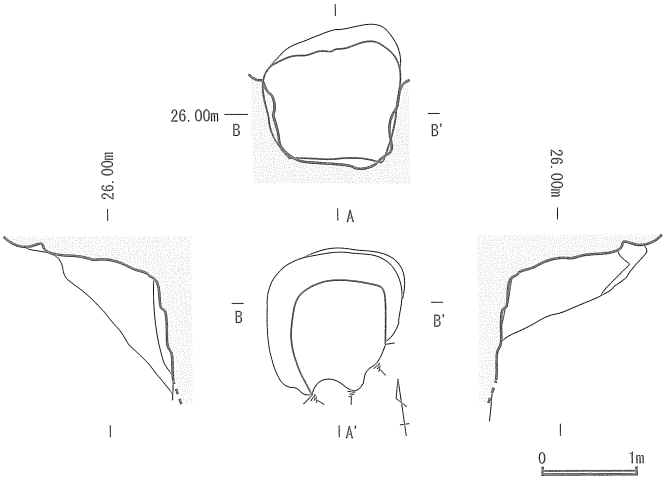


図10　６号横穴展開図(1/80)

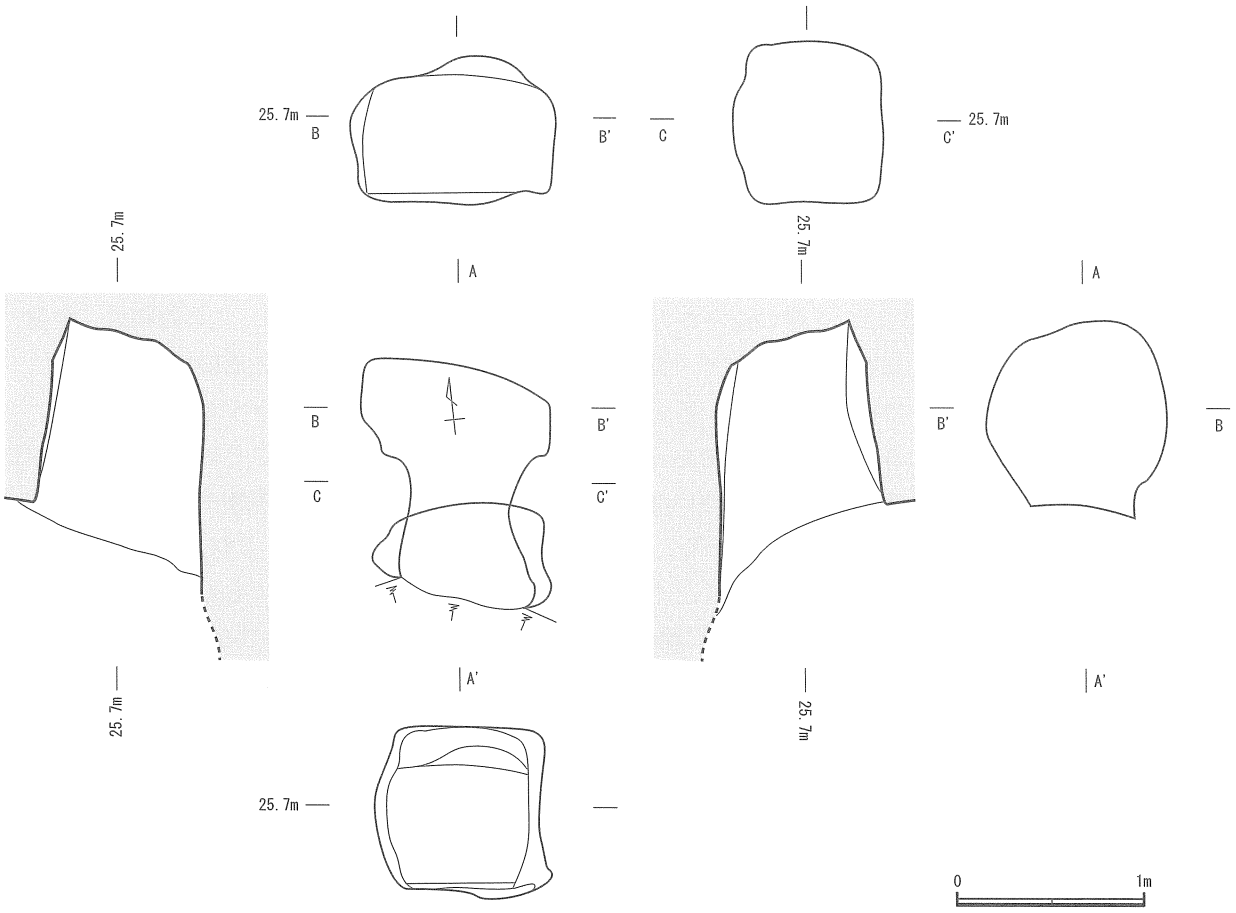


図11　宗光寺横穴群横穴状遺構展開図(1/40)

規模と形状　この横穴状遺構は「Ｔ」字形の平面形を持ち、側壁と奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井は平天井であった。ただし、天井は床面に比べると不正形である。奥壁は長方形を呈する。

床面残存長は1.22m、高さは開口部が0.85m、奥壁が0.62mである。幅は開口部床面が0.70m、奥壁が1.00m、開口部から0.4m付近で最も狭まり、0.52mである。なお、先述のとおり、開口部付近は宅地造成などに伴い破壊されており、本来的な形状としては、開口部側がさらに延びているものと考えられる。この遺構の主軸方位はN-5°-Eである。

４．小結

調査では、ほぼ同じ標高で東西に並ぶ３基の遺構を確認することができた。このうち中央の遺構は、左右の遺構を破壊した後に構築されていることと、近隣住民の話から、戦時中に掘削された防空壕あるいは貯蔵穴と考えられる。形状も、周囲に遺存する古墳時代後期以降の横穴とは大きく異なる。残る２基は、1985年の調査で５号横穴・６号横穴として確認されている横穴であった。もっとも、奥壁付近のごく一部の残存に留まり、比較的小型の横穴であったことは推測できたが、本来的な形状や規模を知ることはできなかった。遺物も出土しなかったため時期を特定することはできなかったが、周辺遺跡の事例から古墳時代後期～奈良時代の所産と考えられる遺構である。なお、中央に位置する横穴状遺構は、この２基の横穴の中央にあり、両者を連接することで空間を得たものと考えられる。また、２区からは、近世陶磁器の細片が出土した。出土位置付近には、「お稲荷さん」を祀った祠があり、これに関わる遺物と推定される。

第５節　横山段横穴群

１．概要

横山段横穴群は、近年、新たに発見された横穴群である。今回、実施した調査では、４区が横山段横穴群に相当する。調査対象面積は224㎡である。調査では、１基の横穴状遺構の存在を確認し、この遺構とその周辺の調査を行った。

調査の結果、横穴状の遺構は、戦時中の防空壕跡の可能性が高いことが明らかとなった。ただし、古墳時代後期～奈良時代初頭の横穴をもとに、掘削し直された可能性も考えられる。なお、この遺構は、宗光寺横穴群と異なり、角礫凝灰岩中に掘削されていることも特徴的である。

２．遺構（図12～14）

位置と残存状況　調査を実施した遺構は、丘陵裾部に所在し、床面の標高は約17.5ｍであった。現状においては、遺構の近辺はほぼ垂直に近い斜面となっており、その比高差は５～10ｍ程度である。もっとも、この傾斜は本来的な地形ではなく、宅地造成によるものである。

そのため、開口部付近は宅地造成に伴い破壊されており、表面の風化が著しかった。しかし、その他の部位の残存状況については、概ね良好であるといえよう。調査前は、周囲を雑草が覆い、遺構内部には、最大幅５～80㎝程度の礫が多数充填されていた。戦後は、物置としても使用されていたようである。また、宅地造成に伴い、開口部付近は、コンクリートがうたれていた。なお、調査においては、遺構内に詰め込まれていた礫のうち、床面直上のものは、人力では除去できない規模であったため、床面は一部の検出に留まった。ただし、床面の概ねの状況を把握することはできた。

形状と規模　この遺構は南西に開口し、開口方位はＮ-40°-Ｗである。床面の形状は奥壁側がやや広がる長台形で、天井は平天井的であるが、全体的にわずかながらも丸みを帯びている。

縦断面形態は、奥壁と天井部が全体的に丸みを帯びるため、長楕円的な形状である。床面の状況は上記のとおりであるため、詳細を把握できなかったが、平坦面が少なく全体的に不正形であり、奥壁から開口部に向かい緩やかに下る形状であることは、うかがい知ることができた。横断面形は、開口部付近は上下を長軸とする楕円形で、奥壁付近に至るにつれ長方形に近くなる。

規模は、残存長2.60ｍ、床面の残存長は2.40ｍである。床面における幅は開口部が0.85ｍ、開口部から0.80ｍの所で最も狭まり0.65ｍ、奥壁幅は0.90ｍである。なお、この遺構は、床面から0.2ｍ～0.8ｍ上部の幅が最も広く、開口部では0.95ｍ、最も幅を狭める0.80ｍ地点でも0.90ｍ、奥壁が0.95ｍである。

高さは、開口部が1.40ｍであるものの、開口部より0.60ｍ地点から1.95ｍ地点までは、概ね1.55ｍである。奥壁高は1.25ｍと推定される。なお、この遺構からの出土遺物はなかった。

３．小結

横山段横穴群は、今回が初めての調査である。宅地造成による地形の改変が著しいこともあり、調査対象範囲内においては、上述した１基の横穴状遺構を確認したに留まる。しかし、周囲には広く角礫凝灰岩が露頭するため、調査区外において、他にも同様の遺構が存在する可能性は考えられる。

調査を実施した横穴状遺構は、出土遺物がなかったため、遺物から時期を特定することはできない。ただし、周囲に見られる古墳時代後期～奈良時代初頭の横穴とは形状が異なることと、近隣住民の話から、戦時中に掘削された防空壕と考えられる。もっとも、先述のとおり、横穴を再利用し、防空壕とした可能性はあるだろう。

図12　横山段横穴群調査範囲(1/500)

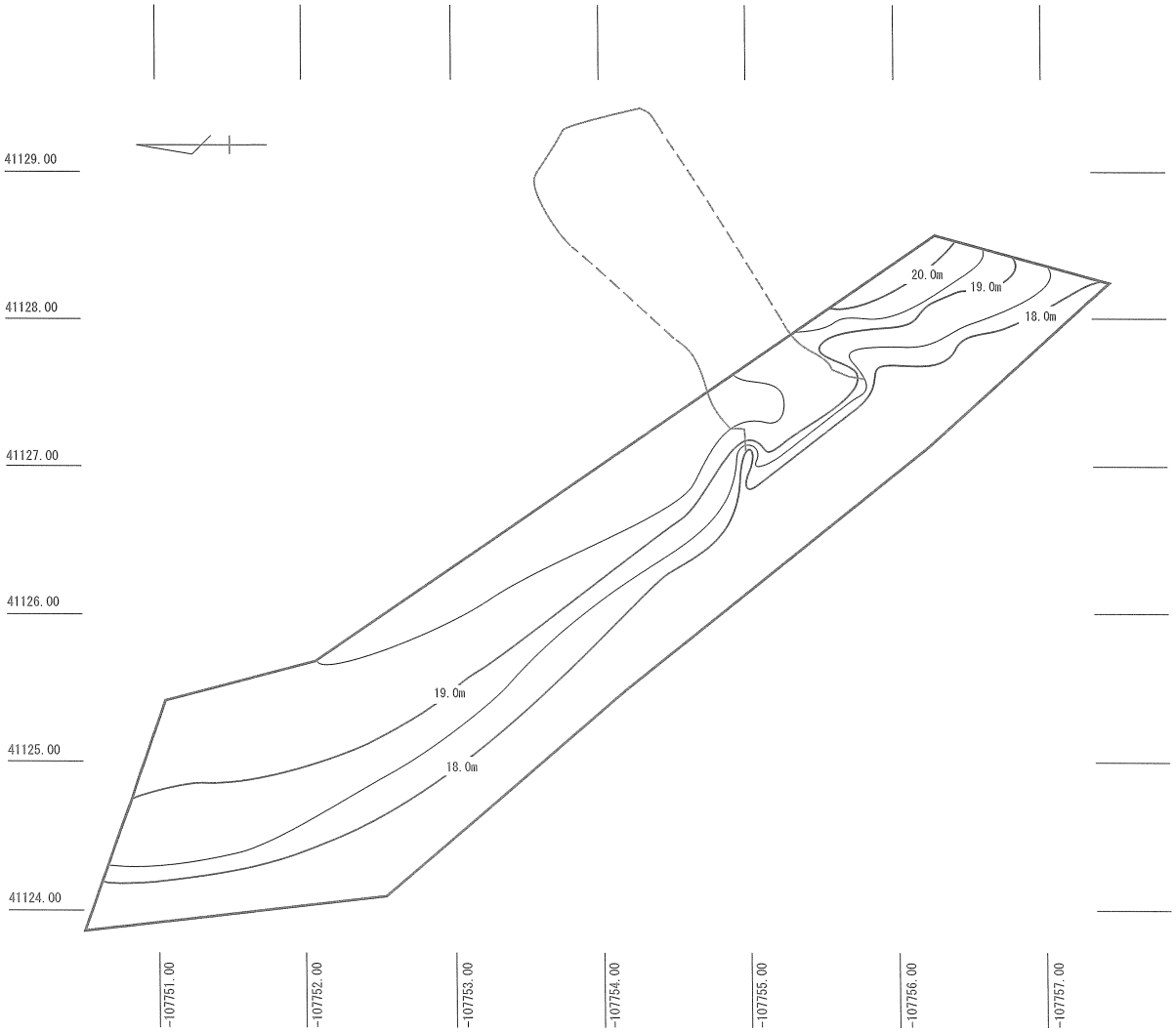


図13　横山段横穴群横穴状遺構と周辺の地形(1/50)

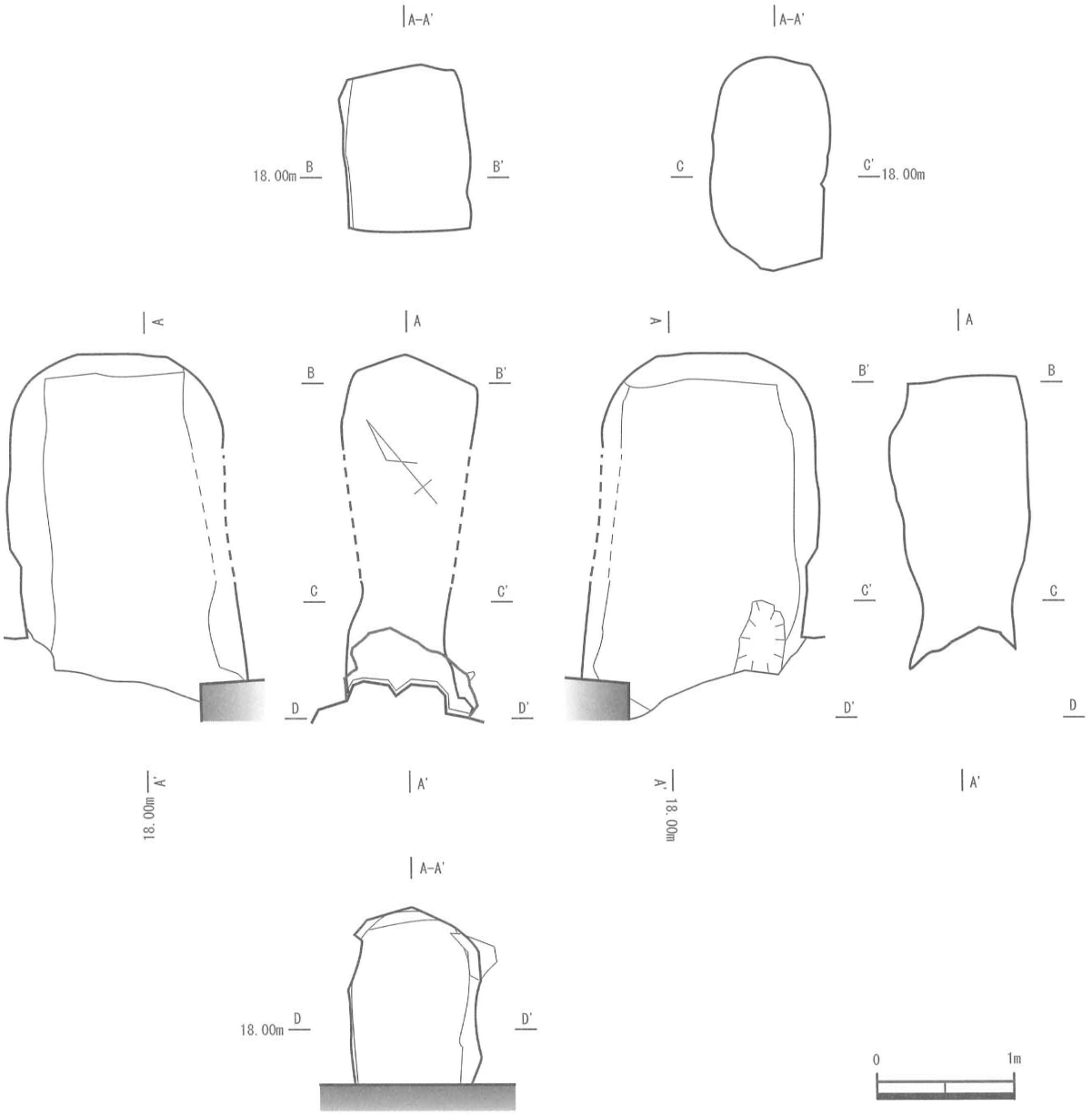
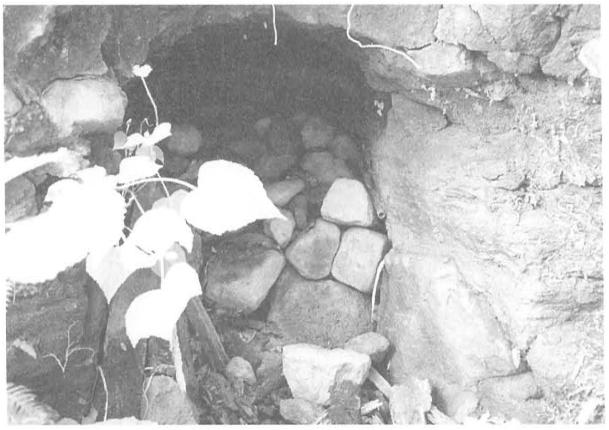


図14　横山段横穴状遺構展開図(1/50)



横山段横穴　横穴状遺構調査前の状況

横山段横穴　調査状況

４章　総　括

１．調査のまとめ

平成19年度における宗光寺横穴群・横山段横穴群の調査では、宗光寺横穴群で３基、横山段横穴群で１基、合計４基の横穴状の遺構を調査した。このうち、宗光寺横穴群の２基は古墳時代後期～奈良時代初頭の所産と考えられる横穴であり、残る１基と横山段横穴群の１基は、戦時中に掘削された防空壕あるいは貯蔵穴であることが調査の結果判明した。

宗光寺横穴群で調査した２基の横穴は、1960年の調査により５号横穴・６号横穴として確認されているものである。ただし、両者とも奥壁近辺をわずかに残すのみで、後世の開発により大半を消失していた。そのため、詳細な形状等は不明である。また、遺構からの出土遺物もなかった。宗光寺横穴群ではこの他に、１基の横穴状遺構を調査している。この遺構は、形状も周囲に残存する横穴とは大きく異なる。防空壕をこの近辺に掘ったという、近隣の古老の話と合わせて考えると、この遺構は防空壕跡である可能性が高い。ただし、近辺の斜面が大幅に掘削されていることから、本来的な規模を示すものではないようである。この遺構の東には５号横穴、西には６号横穴が接する。５号横穴・６号横穴を利用し、その中間部を掘削することで両者を連結して、防空壕とした可能性が考えられる。残存したのは、その最奥部であろう。ただし、規模が小さく、より新しい時代の貯蔵穴の可能性もある。

なお、宗光寺横穴群の横穴は凝灰岩に掘り込まれている。今回の調査対象範囲においては、凝灰岩は、東端部の１区では、薄い表土の直下に確認できたが、２区との区境近辺から急激に地中深くに沈み込んでいた。２区中央では褐色系の粘土層が厚く堆積し、２区西寄りから３区にかけては、角礫岩が地表近くまで迫り上がる様子が確認できた。また、北側の５区では、２区中央部から続く褐色系の粘土層が広がり、横穴が穿たれる凝灰岩は見られなかった。ただし、３区東端部の北側約10mには、凝灰岩が露頭し横穴が開口している。宗光寺横穴群の分布の西限に近いと考えられるこの横穴と、今回調査した６号穴群の間に、横穴が分布しないのは、この地質的な要因であることが明らかとなった。

横山段横穴群では、１基の横穴状遺構を調査した。全長2.60m、幅0.95m、高さ1.55mと細長く、高さのあるこの遺構は、周囲に見られる古墳時代～奈良時代の横穴とは形状が異なることと、近隣住民の話を勘案すると、戦時中に掘削された防空壕である可能性が高い。角礫凝灰岩に掘り込まれていること

図15　宗光寺横穴分布図(1/1,500)

も、宗光寺横穴群の横穴と異なる点である。ただし、元来存在した横穴を拡張・改変することで、防空壕として再利用した可能性もあるだろう。

２．５号横穴・６号横穴と宗光寺横穴群の位置付け

宗光寺横穴群は、1985年の調査により、19基の横穴の所在が明らかにされ、さらに、今回の調査に先立つ現地確認によって新たな横穴が１基確認され、合計20基の横穴の存在が知られている。

今回の調査により、宗光寺横穴群として周知される遺跡範囲の西半部については、地質的構造が明らかとなった。これにより、宗光寺横穴群の西半部における横穴分布の空白域は、地質的な要因に基づくものであることが判明した。宗光寺横穴群は、東半部においても横穴の見られない箇所がある。現時点では、この東半部における分布の空白域の要因を特定することはできないが、少なくとも、宗光寺横穴群は、大きく３支群に区分することができる。ここでは、13～18号横穴を東支群、１～12号横穴と19号横穴を中央支群、１基のみであるが、西端部の横穴を西支群と呼称する（図15・註１）。

このうち、13基が属する中央支群は（註２）、８号横穴と９号横穴との間に走る尾根筋により、さらに東西に細分が可能である。本書で報告した５号横穴と６号横穴は、中央支群の西群に属する。この群には、他に２～４号横穴、７・８号横穴が属する。この７基の横穴のうち、２号横穴と５・６号横穴は奥壁付近を残すのみであるが、残る４基は遺存状況も良好で全貌がうかがえる。３号横穴は、いわゆる復室構造といわれるものである。伊豆では他に４例が確認されているにすぎない形態である（註３）。４・７・８号横穴は不明瞭ながらも袖をもち、両袖式と捉えられる。玄室の平面形は台形で、横断面形は概ねアーチ形である。各横穴の時期については、出土遺物等が不明であるため、特定はできない。ただし、３号横穴は、同じく復室構造である柏谷60号横穴が８世紀に位置付けられていることから、これに近い時期の所産と考えられる。４・７・８号横穴は、形状が似ており、近い時期に築造されたものと考えられ、３号横穴よりも早い時期か、遅くとも同時期に築造されたものと推測される。

これらの４基の横穴と、今回調査した５・６号横穴を対比させてみると、両横穴とも奥壁幅が狭く比較的小型の３号横穴の奥壁幅にも及ばず、小型の横穴であったことがうかがえる。もっとも、これが階層差であるのか、時期差であるのかは、今回の調査で得られた資料からは判断できない。ただし、わずかに残存する奥壁は、長方形あるいは台形と推測され、アーチ形の４・７・８号横穴とは異なる形状の横穴であった可能性がある。また、３号横穴のように復室構造であったことも想定できるが、その可能性は低いであろう。５・６号横穴の形状を推定することは難しいが、中央支群西群の他の横穴とは、若干性格が異なるもののようである。なお、中央支群西群は垂直分布（図16）と平面分布からは、２～４号横穴、７・８号横穴、５・６号横穴がそれぞれ最小の単位群をなすものと考えられる。

最後に宗光寺横穴群全体の位置付けを考えたい。宗光寺横穴群全体としては、玄室平面形は台形、横断面形は台形あるいはアーチ形となるものが大勢を占め、３号横穴のみが特異な形状である。ある程度実態が判明している中央支群と東支群を比較すると、羨道を持つタイプは中央支群に限られるという差異が見られる。基数も中央支群は東支群の倍であり、横穴の規模も総体的に中央支群が大きい。中央支群は、宗光寺横穴群の中心

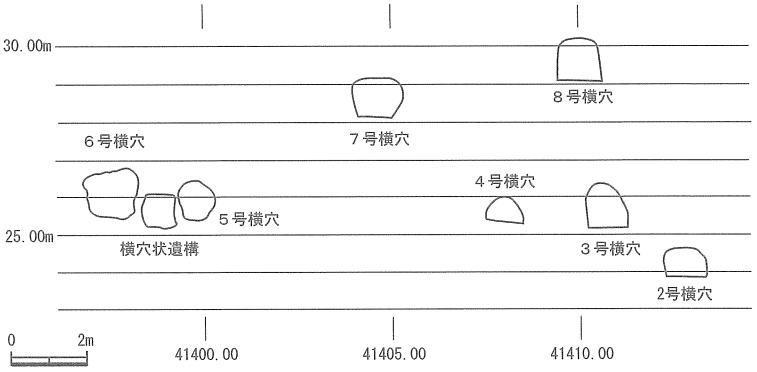


図16　中央支群西半の横穴分布状況(1/200)

的支群と考えられる。ただし、石櫃が存在したといわれるのは東支群に属する17号横穴である。両支群とも、８世紀代にまで造営が続くといえる。横穴群の造営開始時期は決定的な手がかりを欠くが、両頭金具が出土していることから、７世紀後半以前に埋葬行為が行われていることは確かである（註４）。なお、過去の調査において鉄釘も出土しており、宗光寺横穴群では木棺も使用されていたことがうかがえる。

宗光寺横穴群は、狩野川以東においては石櫃を持つ唯一の横穴群である。さらに、注目できるのは、横穴群の南西約300ｍには、古代寺院の宗光寺廃寺が存在する。狭隘な平野ながらも、古墳時代後期以降、一定程度の勢力を保った集団がいたことが想起される。田京周辺には田方郡衙が存在したという指摘もある（小野1973）。しかしながら、これまで宗光寺横穴群は、横穴形態の検討を含め、研究の俎上に載ることは希であり、実態が解明されていない部分が大きい。今後、これらの検討を経ることで、この地域の歴史像を明らかにすることができるだろう。今回の調査ならびに本書がその一助となることを期待したい。

現地調査ならびに資料整理にあたっては、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、伊豆の国市教育委員会、伊豆の国市宗光寺地区自治会および遺跡近隣の方々に御協力・御助言を賜った。文末ではあるが、記して感謝の意を表したい（五十音順・敬称略）。

池谷初恵　岩本貴　大谷宏治　山田康雄

註

1　現在、各横穴の名称については、伊豆の国市教育委員会にて、再調整をしている。そのため、横穴の遺構番号については、静岡県1986を参照した。

2　垂直分布を見ると、19号横穴のみが離れて高所にあるため、他の12基と同一群としては捉えがたいが、便宜上ここでは中央支群に含めた。

3　伊豆では、宗光寺３号横穴以外には、柏谷60号横穴・柏谷64号横穴・日守中里25号横穴・日守中里26号横穴が復室構造の横穴として知られている。

4　横穴系の埋葬施設であり、盗掘にあっているため、断定はできないが、副葬品組成は、宗光寺横穴群は、北江間横穴群よりも、より古墳時代後期的な印象を受ける。

参考文献

伊豆長岡町教育委員会　1981　『大北横穴群』
伊豆長岡町教育委員会　1996　『伊豆長岡町史』上巻
漆畑実　1973　「大仁町の弥生・古墳時代遺跡」『大仁町の古墳文化』大仁町教育委員会
長田実　1951　「伊豆半島の古代文化」『伊豆半島』静岡県
小野真一　1973　「大仁町の弥生・古墳文化」『大仁町の古墳文化』大仁町教育委員会
軽部慈恩・尾形礼正　1965　「伊豆大仁町宗光寺　富士見夫婦塚古墳の発掘調査」『日本大学文理学部研究年報』第13輯
静岡県教育委員会　1986　『駿河・伊豆の横穴群』　本文編　静岡県文化財調査報告書第35集
静岡県考古学会　2001　『東海の横穴墓』　静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
滝沢誠　2005　「原始・古代の伊豆と海上の道」『伊豆の歴史と文化の創造』静岡大学人文学部
中川成夫・岡本勇　1966　「伊豆宗光寺横穴群の調査」『史苑』第26号２・３号　立教大学史学会
長野康敏・鈴木敏中　2001　「伊豆の横穴墓」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
韮山町史編纂委員会　1995　『韮山町史』第10巻
松下虎次郎　1901　「伊豆国田方郡田中村の横穴」『東京人類学会雑誌』第17巻　第119号

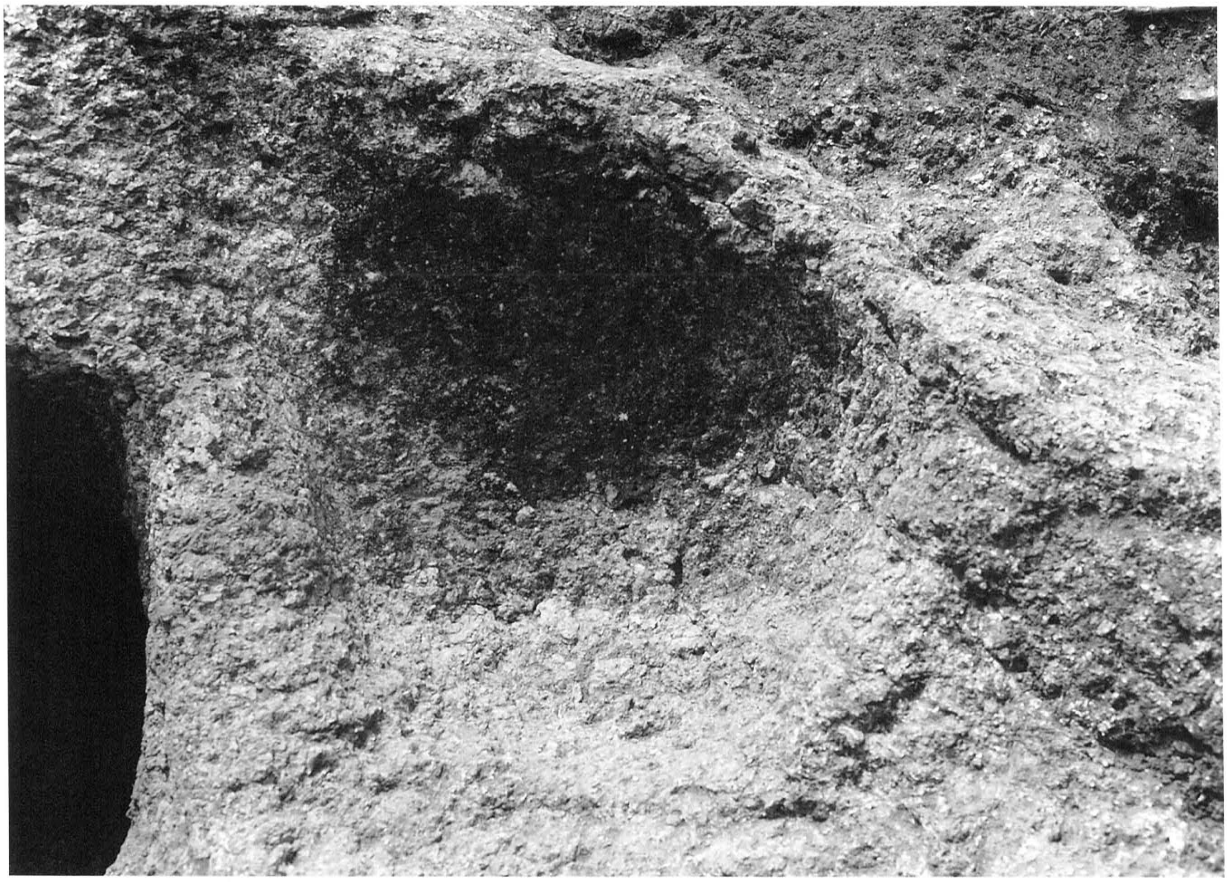
写　真　図　版

１　遺跡遠景（南東から）

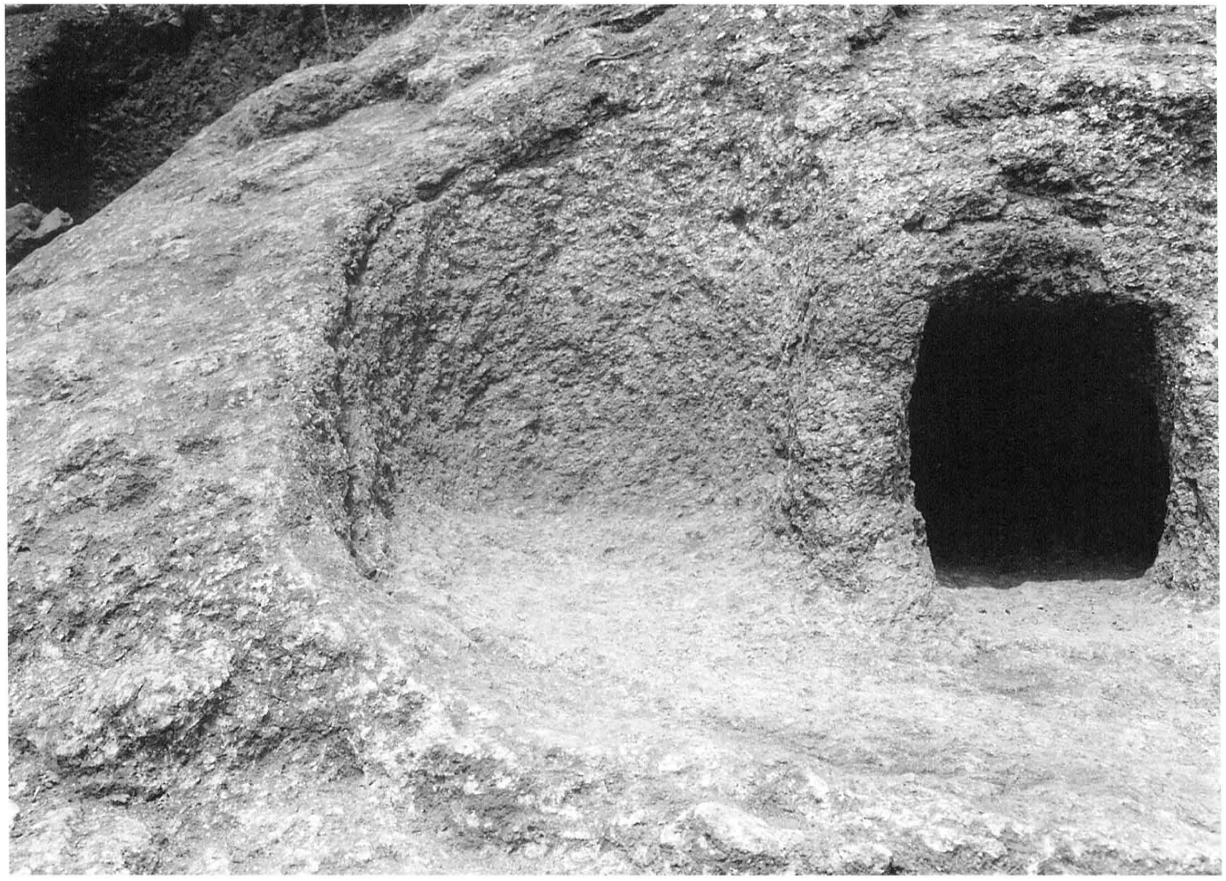
２　調査区遠景（南から）

図版２
宗光寺横穴群

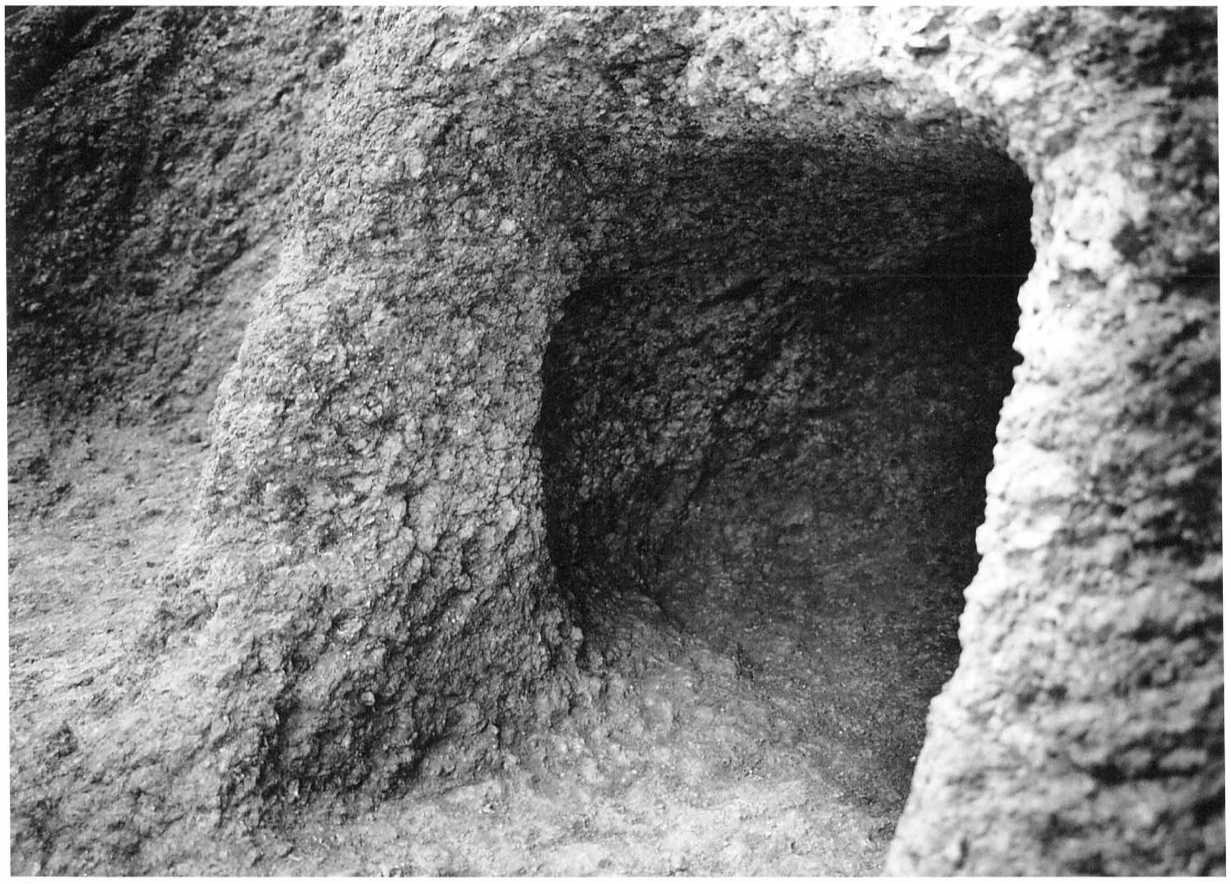
１　１区全景（南から）



２　５号横穴遺存状況（南から）

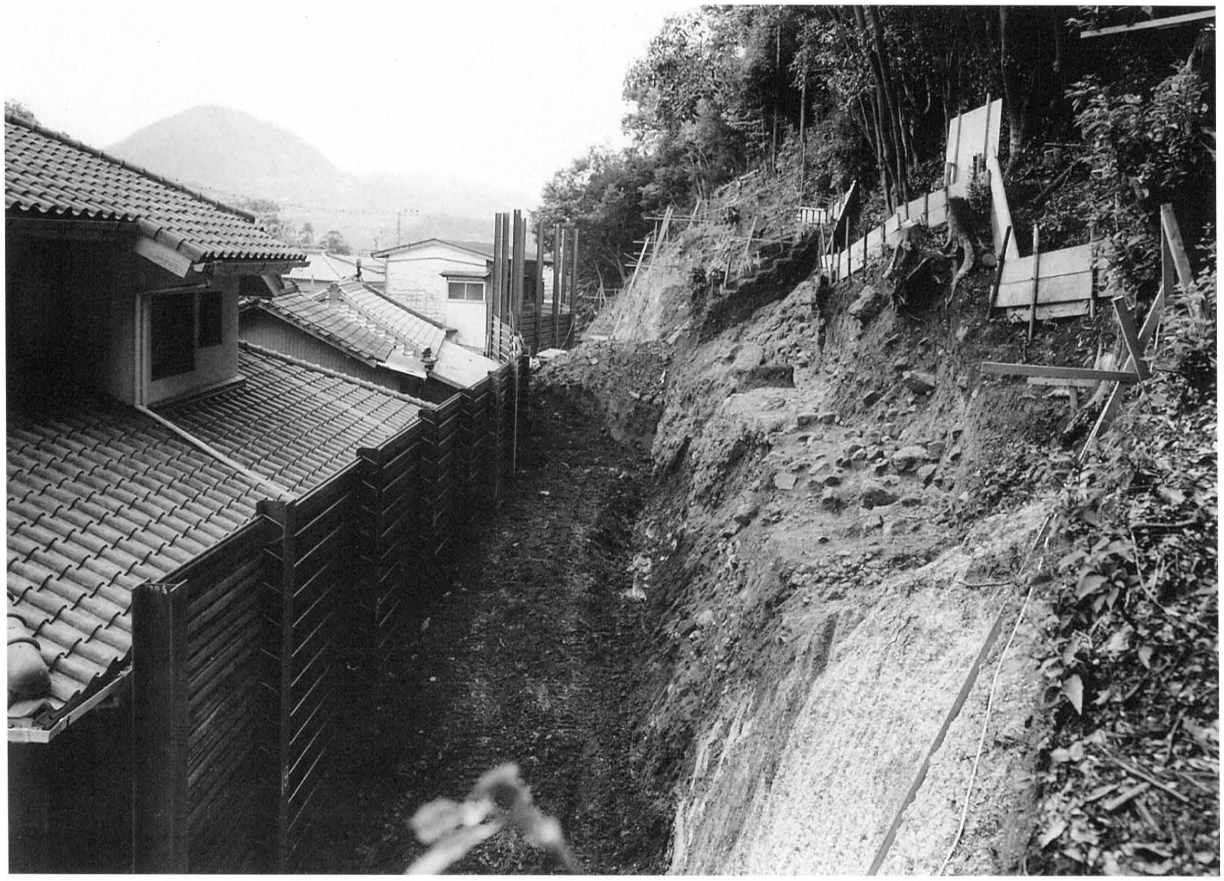


１　６号横穴遺存状況（南から）



２　横穴状遺構開口部と西壁（南東から）

図版４
宗光寺横穴群



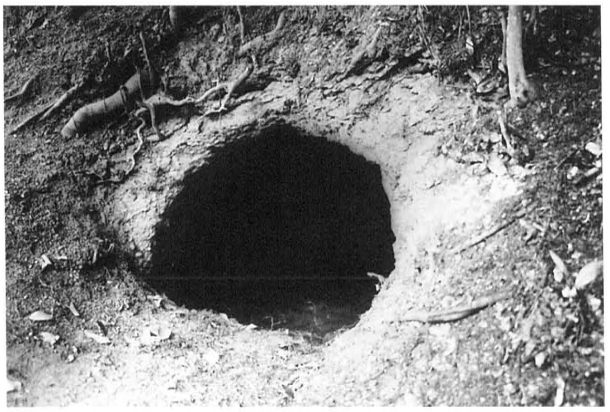
１　２区全景（東から）

２　３区西側トレンチ東半部（東から）

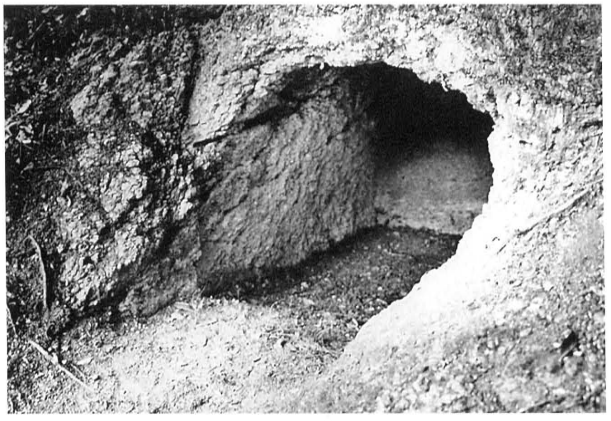
３　３区西側トレンチ西半部（東から）

１　５区全景（南東から）

２　３区東側トレンチ全景（東から）



３　周囲に現存する横穴１（４号横穴　南東から）



４　周囲に現存する横穴２（７号横穴　南東から）

図版６
横山段横穴群

１　調査区全景（北西から）

２　横穴状遺構全景（南西から）

３　横穴状遺構左壁（西から）

４　横穴状遺構右壁（南から）

報告書抄録

ふりがな	そうこうじよこあなぐん・よこやまだんよこあなぐん
書名	宗光寺横穴群・横山段横穴群
副書名	平成19年度　横山段急傾斜地崩壊対策(公共関連一大規模)工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第180集
編著者名	菊池吉修
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20　TEL054-262-4261(代表)
発行年月日	西暦　2007年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
そうこうじよこあなぐん 宗光寺横穴群	しずおかけんいずのくにし 静岡県伊豆の国市 そうこうじ 宗光寺654他	22225	187	35度 1分 37秒	138度 57分 12秒	20090601 ～ 20090905	456㎡	その他(平成19年度横山段急傾斜地崩壊対策)
よこやまだんよこあなぐん 横山段横穴群	しずおかけんいずのくにし 静岡県伊豆の国市 そうこうじあざよこやまだん 宗光寺字横山段	22225	222	35度 1分 39秒	138度 57分 2秒	20090601 ～ 20090905	224㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宗光寺横穴群	横穴	古墳	横穴２基		古墳時代後期～奈良時代初頭の横穴
		昭和	防空壕１基		
横山段横穴群	横穴	昭和	防空壕１基		

要約	宗光寺横穴群は、過去に３回の調査が行われ19基の横穴の存在が確認されている。今回、調査を実施したのは、このうちの５号横穴と６号横穴である。調査の結果、６号横穴の西側で、宗光寺横穴群において横穴が築かれる凝灰岩が地中深くに潜り込むことが明らかとなり、５号横穴は宗光寺横穴群の中央支群では、もっとも西側に位置する横穴であることが判明した。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第180集

宗光寺横穴群・横山段横穴群

平成19年度　横山段急傾斜地崩壊対策(公共関連一大規模)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19年12月25日発行

編集・発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054-262-4261㈹
FAX　054-262-4266

印刷所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　静岡県沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055-921-1839㈹